

樹 守

事務局 ☎060 札幌市中央区北4条西5丁目
(財)北海道森林保全協会内

—日本樹木医会北海道支部会報—

☎011(251)4151

1995年4月28日 発行

発行人 中内武五郎 [美唄市西4条北3丁目6-26]

(平成7年) NO. 5

編集人 小田島 悦

随 想

樹木医の悩みいろいろ

館 和 夫

樹医では獣医と間違えやすいということで樹木医という名で制度が発足してから4年あまり。巷には樹医などというまぎらわしい名前の民間資格が行われていることもあって、いまだに世間では樹木医という呼び名が定着していないように見えるのは残念至極である。

まだ役所づとめの、いわばインターンの身で、日頃から大して活動しているわけでもない私が、ことごとく言い出すのはちょっとおこがましい気もするが、端的に言ってこの制度が有効に活用され、従事する人間が社会的に認知されるまでには、まだまだクリヤーしなければならない多くの問題点があるように思う。

制度が登場した頃のホットな話題性は消え去り、世人がお手並み拝見とばかり、冷静に実績の積み上げを期待している今日、われわれ樹木医がそれらの声に応じていくためには並々ならぬ努力が必要なことはむろんである。それだけにわれわれが現在当面する悩みの一端を率直に吐露して、関係機関、並びに支援の皆様のご協力を仰いで難局の打開を図りたいと思うのである。

悩みの第一は何と言ってもマンパワーの不足である。とくに、小人数で広い区域をカバーしなければならない本道の場合、「まずは実績」という世人の期待とは裏腹に、われわれの活動実績は、なかなかかばかしく目立つようなものにはなりにくい。しかし、何事であれ草創期には悩みは付きものなのであり、それに耐え、発展させて行くだけの知恵と情熱をもたなければ存在価値がないということなのであろう。



なによりもまず会員が、日頃から希望と満足感をもって進んで会の発展に寄与しようと思えるような魅力ある支部づくりが大切である。そのためには日頃から制度のPRにつとめるとともに、会員同士の連携を深める必要がある。地域の自然保護運動の高まりの中で、適時に適当量の仕事が確保されることが重要で、それなくして会の発展はあり得ない。

「樹木医育成→緑の環境財・文化財の保護」という見地にたった、行政機関等による大所高所からの支援がほしいところである。

魅力ある支部は、会員同士の日頃の親睦活動のほか、技術情報など仕事の遂行上必要な情報の交換、各自の得意分野を生かした樹木保護に関する共同の取組みなどといった実践的な活動の中から生まれるものであろう。日進月歩の樹木の補修・樹勢回復技術などマスターしていくことは容易でないが、本会の会員はもちろん、関係分野の研究者や現場技術者との日頃からの連携を密にし、得られた情報は、紹介記事、ないしは「Q&A」のようなかたちで積極的に会誌に反映して行きたい。そのためにも、会員各位の仕事に関して、現場からの通信が待たれるが、何事によらずなにか運動を始めようとする場合、人々が直面する「先立つものがない」とか、「誰かがやるだろう」といった罫に陥るのではなく、「歩きながら考え、考えながら実践」しながら、頑張っていくしかないであろう。

本年度も、過日、日本緑化センターから国庫補助事業としての「樹木医研修受講者募集案内」が発表された。一人でも多くの人々が挑戦して、早く仲間に加わってほしい。繰り返しになるが、樹木医会北海道支部の当面する最大の問題は、やはりマンパワーの不足である。会員各位にも本制度へのご協力、ないしはPRを是非ともお願いしたい。

日本樹木医会会誌バックナンバーのご案内

TREE DOCTOR

(1993年7月創刊号・1994年6月2号発行)

頒価；各1000円、送料別)

発行所 日本樹木医会 〒107

東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル

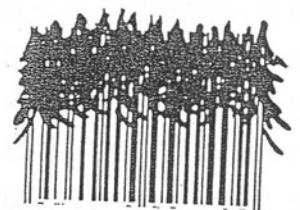
発行人 荻住 昇 責任編集者 近藤秀明・小口健蔵

電話 03(3585)3561(代表)

FAX 03(3582)7714 郵便振替番号 東京2-707881

第一勧業銀行東虎ノ門支店 普通052-1585528

樹木医会本部会員募集中



お知らせ

新しい仲間・窪田樹木医登場



窪田信作樹木医

いささか旧聞になってしまったが、平成6年度の本道関係樹木医として、旭川地区から窪田信作氏が仲間入りをはたした。

昭和17年3月生れの氏は、現在道内に7名いる樹木医の内、最も年齢が若く、エネルギッシュな活躍が期待される人物である。氏の経歴を略記すると、日本大学法学部を卒業、N T Tに勤務。旭川電気通信部を昭和51年に退職した後、日頃から研究していた造園関係技術を活かすべく旭川造園建設株式会社を設立、自ら代表取締役役に就任したという、いささか変わった経歴の持ち主である。昭和61年にはアメリカに渡り、イリノイ州ユーイングキャスター公園において、日本庭園の造成指導に当たった経験をもつ国際人でもある。造園科の職業訓練指導員、中学・高校の教諭免許など、多くの資格を持つ勉強家でありながら、ごく控え目なお人柄で、樹木医会北海道支部入会に当り、本誌に次のような所感を寄せられた。

大地に生み落とされた卵の心境

窪田信作

このたび樹木医の認定を受けることができ、その自覚がなんとも出来上がらなく、やっと少しなれてきた思いで、ここにはじめて『樹守』の紙面をお借りし、北海道支部の皆様にごく仲間に加えていただきたく、厚かましくも心からお願いを申し上げる次第でございます。

平常はまったく確実な一切のことが、またしても問題になるように思えてくる心境で、もはや新しい障害にぶつかり、そこから逃げ出したくなるようなわけのわからない苦しみを味わっております。このような心境から「より高きをめざす」憧れが生まれてくるか、それとも逆に、これも大いにありうることですが「低きに降る」気持ちになるのか、ふらふら……。『樹守』を拝読させていただき、あれほどの表現、今なお私の横に『樹守』があります。ありがとうございます。

すべてが珍しいものばかりで、本当にわくわくしており心躍りをかくしきれません。本当に重々ありがとうございます。どうか今後とも宜しく、心からお願い申し上げます。筆を置かせていただきます。

鈴木 順 策

今回診断したハルニレは、開拓当時の名残の原生木として、昭和58年に北見市の保存樹木として指定されているものである。

この樹木の診断依頼は、樹勢衰退に伴う樹木の倒壊等道路交通上の安全確保と相俟って、保存樹木としての存在価値をも判断するためのものであった。

以下その概要について述べることにする。

*生育環境

周囲の状況：道々仁頃通りの緩やかな傾斜沿いに自生、周囲は住宅地

風：強 最大風速(m/s) 昭和62年sw 13,0

日照条件：良

土地の条件：緩傾斜地

土壌：造成地・

植生：チモシー等

*形状寸法

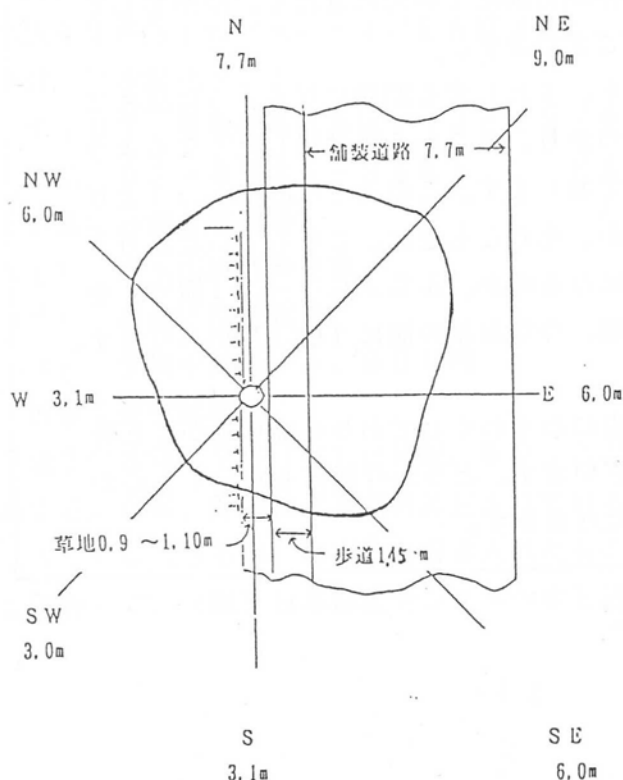
樹高：18m

胸高幹周り：260 ㎝

枝下高：2,3 m

枝張り：E 6,0m・W 3,1m・S 3,1m・N 7,7m

樹冠投影図



* 樹冠はNWからSEにかけて正常であるが、SからW方向は樹勢衰退を示す。

*診断

1、周辺環境の影響

仁頃道路の旧砂利道を舗装道路として改良する際、樹木の保存をどの程度まで優先的に配慮したかは定かではないが、生育している殆どの地下部根系は舗装道路直下であり、加えて、一部分の箇所は根系の生育すべき地下部が切土されている。

2、根系・根元周囲の状況

土壌調査の結果、根系に対する有効深度は84㎝に達し、水平根は良好な伸長を示しているものの、排水・通気性には乏しい条件下にある。



* 処方（保全計画等）

この樹木が将来的には空洞化したとしても、複合的阻害要因を避けるなどの科学的な治療を施すことによって、形成層が環状剥離されない限り、肥大生長を続け樹齢を重ねることは可能である。

1、 当面の保全計画としては、

(1) 根元からの倒壊防止を考慮した地上部の大枝5枝を、樹形に配慮しつつ整形し、地下部とのバランスを図る対策が望まれる。

樹皮剥離箇所は外科手術を施し、カルの生長と巻き込み促進を図る。

(2) 上記1と同時に西側にワイヤーロープによる支柱を施し（隣接土地所有者の承諾が必要）倒壊による危険性を未然に防止する方策が必要である。

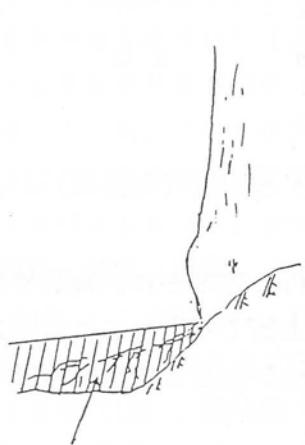
(3) 樹勢回復のための土壌改良は、適時必要に応じて実施すべきである。

2、 長期的保全計画としては、

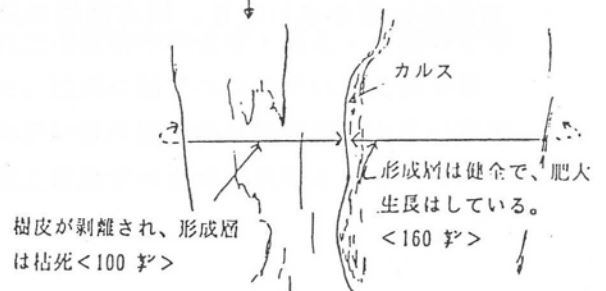
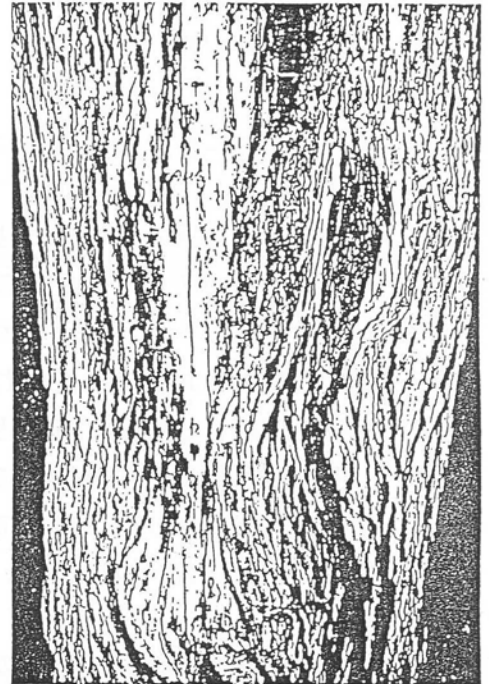
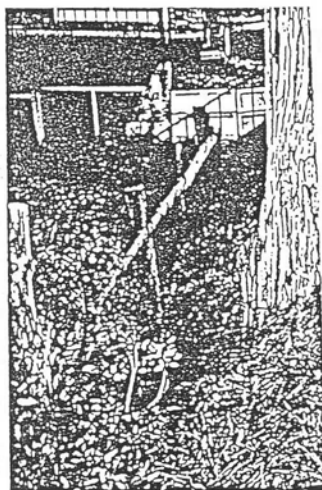
(1) 西側地下部が整備されれば、根張り部分の根系を再生すべきで、接ぎ木等の高度な技術を駆使し、発根促進を図っていく必要がある。

* 特記事項

保全計画等により樹勢回復の措置が講じられても、保存樹木としての存在価値は低下し、加えて、倒壊による危険性等が現実としてつきまとう以上「保存樹木指定の是非論」は、学識経験者等からの総合的判断に委ねられるものであるが、樹木のもつ寿命がある限り、樹勢回復等の万全な措置を講じるべきであることを付記した。



地下部に必要な土壌はカットされている



根の形態は、中・大径の水平根型でありその垂直分布は、浅根型で地上部を支える支持力は大きい。しかし、地下部のカットによって太根等の傷痕部が門戸となって腐朽菌が侵入し、根株辺材腐れが発生している。

根元については、道路改良工事の際盛土によって深植えとなっている。

3、大枝・幹の状況

大枝の切断がかなり多く、その切断面を門戸として腐朽菌が侵入し、樹幹心腐れ、樹幹辺材腐れの外、根系に侵入した腐朽菌が皮層部分を腐朽させ上方に進行し、樹幹の辺材部分を腐朽させた根株辺材腐れを呈する。

特に、西側樹幹の樹皮が剥離しているなどその被害は著しい。

4、枝葉の状況

南から西方向は劣悪であり、数多い大枝の切断が結果としてクローネのバランスを崩している。

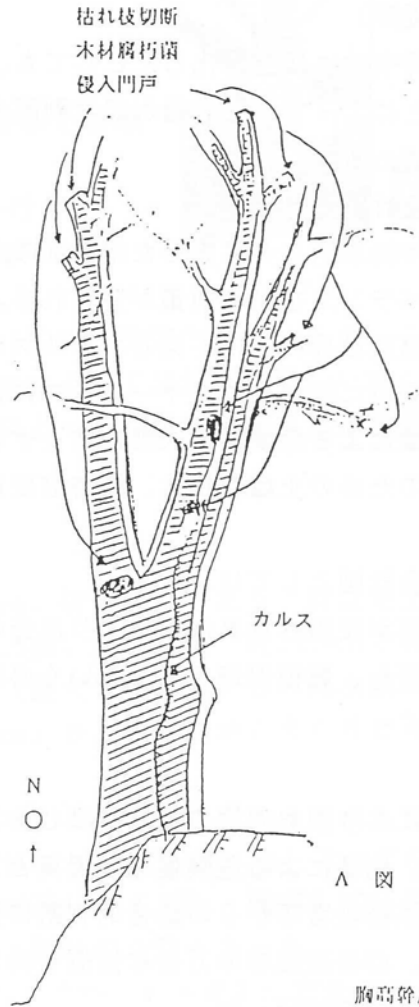
着葉量は中庸

以上4項目について診断したが、総括的には

都市化の発展と相俟って住宅地の密集等周辺環境が変化し、根系の生育すべき西側地下部の一部が切土（太根等の切断も含む）されたまま放置され、木材腐朽菌の侵入と毎年繰り返す季節風（南西風）が、樹勢を衰退させた主たる要因と考えられる。

樹幹の腐朽は、空洞にまで至らない初期から中期にかけた腐朽と想定され、胸高幹周りの60%強の形成層は健全で肥大生長をしているため、当面地上部での生育には支障はないが、地下部については、将来的には強風による倒壊の危険性が生じる要注意木でもある。

したがって、西側地下部の一部切土箇所を盛土し、自生当時の地下部として良好な生育条件に戻さない限り、樹木倒壊の問題は解決されない。

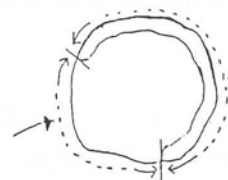


図は、木材腐朽菌が侵入している想定図である。

この樹木は、末期腐朽には至っていない初期から中期にかけた腐朽で、腐朽部分は健全材に比べかなり異なった色調を帯びている。（強度は低下している）

しかし、B図のとおり胸高幹周り260 ㎝のうち、NEからSにかけて100 ㎝程度樹皮が剥離され、形成層は枯死している。

胸高幹周り260 ㎝



樹皮が剥離され、形成層は枯死<100 ㎝>

形成層は健全で、肥大生長はしている。<160 ㎝>

樹皮の剥離は根の切断による根株辺材腐れが原因と思われる。

B 図

昨年の初めから、朝日新聞（道央版）の学芸欄に、「樹医の診察室」という樹木の保護を主体とした記事が週一回のペースで断続的に載るようになり、これまでに中内、斎藤、小田島、館、橋場の5名が連載を終わり、現在、鈴木樹木医が「良いところはみんな先に書かれてしまっていて…」などとぼやきながら連載を継続中である。

これまでの内容を見ると、中内樹木医は植物概論ふうのタッチで10回、斎藤樹木医は樹木の外科手術、街路樹・生け垣などの管理手法を主に10回、小田島樹木医はサクラの管理や緑化樹の腐朽菌、損傷に対する対策などで7回、館樹木医は害虫の種類や対策を主に10回、橋場樹木医は名木の健康診断、手術、管理手法などを主体に10回、それぞれ執筆している。

一方、窪田樹木医の方は北海道新聞から依頼を受けて、桃、梅など果樹に関する連載を始めており、ひきつづき各樹木医にも執筆の依頼がある見込みなので、このところ道内の樹木医は引っ張りだこといった感じである。

各連載記事とも連載が終了しいだい会員中の希望者には、コピーを無料配布するので、関心のある方は事務局までご一報願いたい。

樹医の診察室
中内武五朗

だれでもちょっとしたことからいろいろのドラマが生まれるものである。
私は秋田県の出川にある比

植物たちのドラマ語りたい

内町で生まれた。木も草も土地の人が付けた名で、マダノキ（シナノキ）、マツコノキ（カツラ）、バッケツツキ（トウ）、シノブ（キシキシ）と呼ばれていた。そんな世界で育った私には、木ほと

ろして伸びたり太くなるのたか、だが、いつごろ植物たちを分類し、名前をつけたかも、知りたいことだった。ここから私のドラマがはじまった。現在樹木医という仕事をし

ている中での質問も、こうしたようなことである。水のこどたり、土壌や肥料のことも多い。また花を咲かせる方法、根はどんな働きをしているか、秋になったらなぜ葉が色づくかなど様々なことである。また太陽のこと、雨、雪や植物との関係、昆虫と植物の関係、微生物のこともよく

はかうち、たけごろう。一九四三年東京帝国大学林学専攻科修了。六八年、道立林業試験場樹木科科長。七九年、美瑛市西四北三で植物病院開設。九二年、樹木医認定。



雪の中、木づちと聴診器で樹木の健康診断をする中内武五朗さん。札幌の円山公園で

とある。今回ひびいたような音は、植物をつくるために解説していきたい。特に北海道のような寒地での植物の扱い方などを一なるほどといわれるように書きたいと考えている。

この一本が みどりの大地の主役です

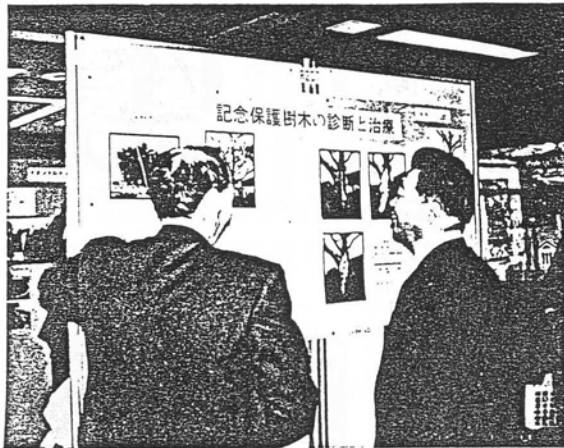


一人一本植樹運動

あなたの身近なところから、みどりをつくり、育ててください



林学会大会での樹木医研究発表終る

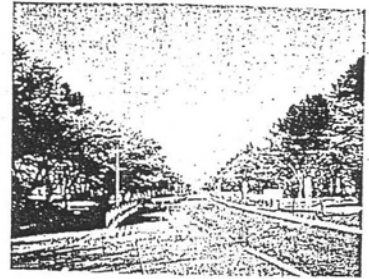


さる4月3日から5日まで、春浅い北海道大学構内で行われた第106回日本林学会大会は、盛況裡に終了した。4日午前中、クラーク会館で行われた研究発表（ポスターセッション）には、道内外の樹木医16名が参加し、コーディネーターの鈴木和夫東京大学教授の司会のもと、多数の聴衆を前に、下記のような標題の研究発表がなされた。なお、道内から参加した4名の発表の要旨は、後段に示すとおりである。

R会場 ——テーマ別セッション（ポスター） 樹木の診断と治療——

（コーディネーター：鈴木 和夫）

R 201	鎌倉山桜並木の病害及び樹勢分布	エコル 日本緑化センター 鎌倉市	神庭 正則 堀 丈才 土屋 志郎
R 202	「穂先八重彼岸桜」の診断と治療	新潟県林業公社	佐藤 賢一
R 203	静内町二十間道路桜並木の診断	北海道森林保全協	小田 島悦
R 204	クリ褐色いが腐れ病の診断と防除	秋田県林技セ 森林総研東北 西木材	加茂谷常雄 庄司 次男・安ヶ平精三 門脇 久吉
R 205	腐朽病の診断(I)	山梨県森林総研 筑波大農林技セ 筑波大農林	大澤 正嗣 黒田 吉雄 勝屋 敬三
R 206	和歌山県に発生するシキミ・サカキの病虫害	森林総研関西 和歌山県 和歌山県林セ	*伊藤進一郎 坂口 和昭 萩原 進
R 207	記念保護樹の診断と治療	北海道林試	橋場 一行
R 208	道南地方の樹木病害虫に関する林業相談一道立林試道南支場の診断事例から一	北海道林試	館 和夫
R 209	テーダマツ溝がんしゅ病の新宿主	材木育種協会 林育セ	*近藤 秀明 田淵 和夫
R 210	熱赤外画像計測法による松の枯損変化	東京都林試	土屋 大二
R 211	イオンクロマト法を用いたラカンマキの根系環境調査について	日大農獣医	本江 一郎
R 212	梢端枯損したヒマラヤスギのAE特性	東京農工大農	*佐藤 敬一・本山 悦子 渡辺 直明
R 213	植物体の水分吸収とAE特性	エコル 東京農工大農	神庭 正則 *佐藤 敬一・本山 悦子
R 214	日光街道スギ並木の樹勢回復に関する基礎的研究(I)一倒幣使街道のスギの衰退と根系保護効果一	宇都宮大農	荻田信二郎・渡辺 直明 *千葉 潤子・谷本 丈夫 大久保達弘
R 215	巨樹に対する外科手術の一例	環境緑化計画	齋藤 晶
R 216	ヒダリマキガヤの樹勢回復	小泉緑化 宮城県林業公社	*早坂 義雄 三嶋 久志



I. 目的

「日本の道100選」や「さくら名所100選」にも選定され、幅36m、延長8kmに及ぶ静内町二十間道路桜並木はそのスケールの大きさから日本一のさくら並木とも言われている。しかしこの並木も近年衰弱がみられ、その実態把握と原因の究明、樹勢回復が求められているが、その一部について、調査診断した結果を展示発表し、今後の桜並木の造成維持等の参考に供したい

II. 方法

総延長約 8kmの二十間道路のうち、農林水産省の所有地を除く町有地分約2.9km、の両側に植栽されている桜並木総本数 1,313本について樹種、樹木の形態、開花状況、病虫害、腐朽・傷の状況、衰退度の判定等について目視と計測調査を、地下部は標準地で土壌断面調査を実施した。

調査は 1992年から1994年までの3年間で行った。

III. 結果及び考察

樹種別では総数 1,313本のうち、エゾヤマザクラ 782本、カスミザクラ 470本、ミヤマザクラ 50本、ソメイヨシノ 9本、サトザクラ 1本、スモモ 1本の樹種構成であった。病虫害では、サクラてんぐ巣病の被害木が総数の 5.5%に、サクラのこぶ病の被害木が 23.8%に及んでおり、特にサクラのこぶ病の被害が桜並木の退廃に大きく影響していることが判った。また枝・胴枯性病害やコスカシバの被害木も散見される。

腐朽の状況は総数 1,313本のうち幹腐れが認められるもの 161本、根株腐れが進行中のもの 36本であった。

当地の土壌の母材は火山性浮石、堆積様式は風積である。車両や観光客の入込みの多い所は踏圧で地表から30cm位までの部分が堅密化し、根量が少ない傾向が見られたが、道路構造の関係で車両が侵入しづらく、踏圧の少ない調査箇所では土層上部も軟らかく、地表から浅い所に太根が分布している傾向が認められた。

各調査木について、衰退の程度、腐朽状況等による診断基準を設け、健全、やや注意、要注意、危険の4ランクに区分して総合評価すると、危険木 93本(7%)、要注意木 126本(10%)、やや注意木 423本(32%)、健全 671本(51%)であった。

対策としては、枯枝や罹病枝の切除、腐朽部の切除、殺菌・防菌・填充処理、隣接木の被圧防止や樹勢回復のため地表を軽く耕うんしての堆肥の施用、施肥、踏圧防止などが必要である。

そのほかに後継樹の植栽、定期的な点検パトロールによる被害の早期発見・早期処置が必要と判断される。

樹木の診断と治療
— 巨樹に対する外科手術の一例 —

斎藤 晶 (株式会社 環境緑化計画)



I. 目的

函館市陣川地区に成育している、推定樹令600年前後のクリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc) の双幹樹 (平均H14m, D1.6m) には、樹体の約75%以上に腐朽や枝枯れが進行し幹枝の枯損が著しい。この状態で放置すると、今後、数年の寿命と考えられる。この樹木は「ご神木」として、また、由緒ある「クリの木」としても崇拝されるなど、多くの市民から親しまれていることから、修復治療が必要とされている。このため、樹木に対する外科手術を施し、寿命の延命策を講じた。

II. 方法

1994・11月中～下旬にかけて治療対象木の調査を行った。調査方法は出現する腐朽現況を把握すると共に、幹枝の各部分 (1m間隔) の直径から断面積を求め、幹枝内の腐朽程度の測定が困難な場合、成長錐を2～3方向からさし込み、その幹材のコアを計測し断面上の健全部と腐朽部を求積した。さらに各直径階ごとに円錐台の計算式 $V = \frac{\pi \cdot h}{3} (r^2 + Rr + R^2)$ によって現状を解析し、治療方法および資材量について検討した。

III. 結果および考察

外観上からは、幹枝の枯損、腐朽および樹皮の剥離がみられる。高所作業にはリフト車用い、枯枝の切除、剥皮、腐朽部の切開などには動力機器のチェーンソー、サンダー、エアークンプレッサー、掃除器、噴霧器。手動器具では手鋸、パール、ノミなどの大工道具を必要に応じ使い分けた。治療工程は、被害状況によって腐朽幹部の摘出、枯皮の剥離を行い、健全部に対し殺菌消毒を施した。これらの処置で生じた空洞溝が大きな幹部には、防腐処理した短材と鉄筋を埋込むと共に各材料の隙間と表面には発泡ウレタンを注入し充填した。また、剥離した皮下木部と充填部の表面には、成長ホルモンを含有し、しかも樹皮と同系色を示す粘性の人工樹皮を塗布し雨水や雑菌の侵入を防ぐ処置を施した。さらに外科手術を施した幹部には健全な木部が少なく、強風や積雪の重圧によって処置基部の幹・枝折れなどの被害発生が予測されるため、荷重が集中する枝条部分には二次的な被害を回避するため支柱を架設した。このほか治療患部が大きい樹幹部には、寒風や野鳥などの被害を軽減させるため緑化テープを包帯して保護した。また、地表面に露出する根系の保全と土壌の堅密度を柔らげるため盛土を行い一連の外科手術を完了した。

樹木に対する外科手術は、以前から幹枝内の腐朽進行を食い止め、傷口の癒合を促進させるなどから、特に衰弱した老朽木を若返らせる「蘇生技術」として知られている。今後、この方法を取入れることによって、由緒ある巨樹、名木および美林の寿命が延命されるなど自然保護に貢献することが可能な樹木の保存技術として期待できるものと考えられる。

IV. まとめ

生物である樹木は、いくら保存技術を施しても、自と生存限界がある。このため歴史ある巨樹、名木については二代目となる後継子孫の遺伝資源を養成保存し、貴重な緑の遺産を末永く後世に伝承することが必要であろう。

道南地方の樹木病害虫に関する林業相談
— 道立林試道南支場の診断事例から —

館 和夫 (北海道林試)



I. 目的

地域の樹木病害虫に関する情報需要の内容を知ることによって、今後の保護対策の推進に役立てるため、住民や関係者から寄せられた林業相談の内容について分析を試みた。

II. 方法

北海道立林業試験場道南支場で、1970年から1995年までに取扱った樹木病害虫に関する照会・回答の記録を調べ、害虫の加害形態別・樹病の罹病場所・態様別相談件数の頻度を図示するとともに、樹種ごとに主な病害虫名をあげ、関心のある対象について考察した。

III. 結果および考察

期間中の樹木病害虫に関する相談は、害虫 285件、樹病および材質腐朽菌が 169件 (合計 454件) で、それぞれ図 1、図 2に示す頻度であった。害虫は吸汁害虫の割合が32%で最も多く、食葉害虫と穿孔害虫は約20%でそれに次いでいた。樹病は枝・胴枯性の病害が43%で、葉枯性の病害 (24%) や、樹体の奇形を伴う病害 (21%) などを上回っていた。

相談件数から見た樹種別の主要病害虫名は、次のとおりである。[害虫] <イチイ> ナガチャコガネ (22)、スギマルカイガラムシ (7)、イヌガヤワタカイガラムシ (5)、<アカマツ・クロマツ> マツカレハ (4)、マツノキクイムシ (14)、マツアワフキムシ (11)、マツツマアカシムシ (10)、マツバナタマバエ (12)、<ゴヨウマツ> マツカサアブラムシ (6)、<スギ> スギノアカネトラカミキリ (5) <クルミ> クルミシンクイガ (5)、<クリ> クリタマバチ (8)、クリシギゾウムシ (4)、クリミガ (4)、<サクラ> コスカシバ (4)、エゾシロチョウ (3)、ササキコブアブラムシ (3)、<ツツジ> ツツジゲンバウムシ (3)、ツツジコナカイガラムシ (3)、他26樹種 (152) [樹病] <アカマツ・クロマツ> 皮目枝枯病 (46)、こぶ病 (3)、材質腐朽菌 (4)、<スギ> 黒粒葉枯病 (6)、<改良ポプラ> 胴枯病 (5)、<サクラ> てんぐす病 (13)、胴枯病 (7)、さめ肌胴枯病 (4)、<ナシ> 赤星病 (3)、<ツツジ> もち病 (5)他24樹種 (73)

IV. まとめ

期間中の相談件数を見ると、造林木より移入された市街地の緑化樹・花木・果樹等が当面の保護対象として一般の関心を集めている。また、枯死に結びつきやすい穿孔虫や枝・胴枯性の病気のほか、実害は少ないが景観上問題の多い吸汁害虫や食葉害虫・虫えい害虫の一部に多くの相談が寄せられており、今後、管理上留意すべき点を示唆されている。

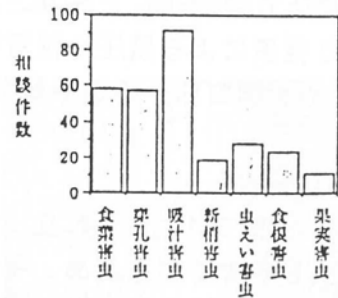


図1. 樹木害虫の加害形態別相談件数

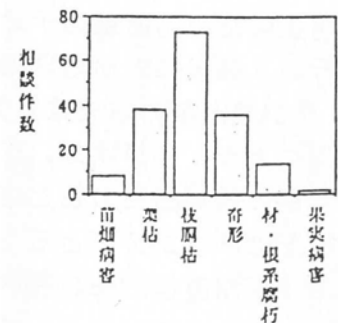


図2. 樹病の罹病場所・形態別相談件数

記念保護樹木の診断と治療

橋場 一行
(北海道林試)



手術前

手術後

はじめに

北海道には記念保護樹として、昭和46年度に 112件が指定されています。これらは指定後20年以上、経過しているため樹齢も高く、樹木によっては衰退が著しいものも見られる。

伊達市の記念保護樹木「寺島の銀杏」が風害によって幹折れが発生し、診断と治療を依頼されたのでその結果について報告する。

1 診断結果

このイチョウは樹齢約 120年で胸高直径 124cm、樹高17mであり、幹は地上 2.4mから分岐していた。枝張りは東方に12.6m、西に 9.5m、南11.5m、北12.0mであった。

平成6年9月30日雨まじりの台風26号の強風（最大風速14m/S、降水量59mm/日）が吹き、この風圧により西向きの分岐幹（直径86cm）が、付け根からえぐりとられた形となり、傷口が大きく開口していた。

開口部分は高さ 295cm、幅86cmにわたっており、このまま放置すると雨水などが浸透するほか、この部分から腐朽菌が侵入するおそれがあった。また、地上7mぐらいの樹幹部が腐朽により空洞化しており、樹形のバランスが著しくくずれ、残存している幹部も偏奇しており強風による風圧や積雪害を受けやすく、倒伏の危険もあった。

このため、開口部分の速やかな保護措置とバランスのとれた樹形に整形する必要があった。

2 外科的治療

折損した傷口がささくれ立っているため、チェーンソーと切削用ナイフにより、填充材を注入しやすくするため、平滑に削り取った。また、地上7m地点の樹幹が空洞化しており、ここから腐朽侵入し下部に進行しているため、この部分も削り取った。作業にあたっては、切削後のカサの癒合を促進させるため、樹皮はできるだけ残した。

腐朽防止のため防菌剤のチオファネートメチル剤を塗布し、その後に発砲ウレタンの填充を行い、最後に表面処理剤を施した。

ウレタン発泡剤の填充は外気温が3℃で、さらに強風が吹いていたため、お湯で20℃以上を保つよう、心がけた。また、表面処理剤には硬化剤を混入し、硬化を促進させた。表面処理剤の色が樹皮の色と違い外見が良くなかったため、人工樹皮剤により着色した。さらに樹形のバランスをとるため、東向きの側枝3本（平均直径24cm、長さ12.6m）、南向き1本（平均直径22cm、長さ11.0m）を切断し、あわせて枯れ枝や細い不用枝も剪定した。

おわりに

この処置により風害や雪害に耐えうるバランスのとれた安定した樹形となり、倒伏の危険も去ったことから、記念保護樹木として長く保存し、地域住民のシンボルとなることを期待している。

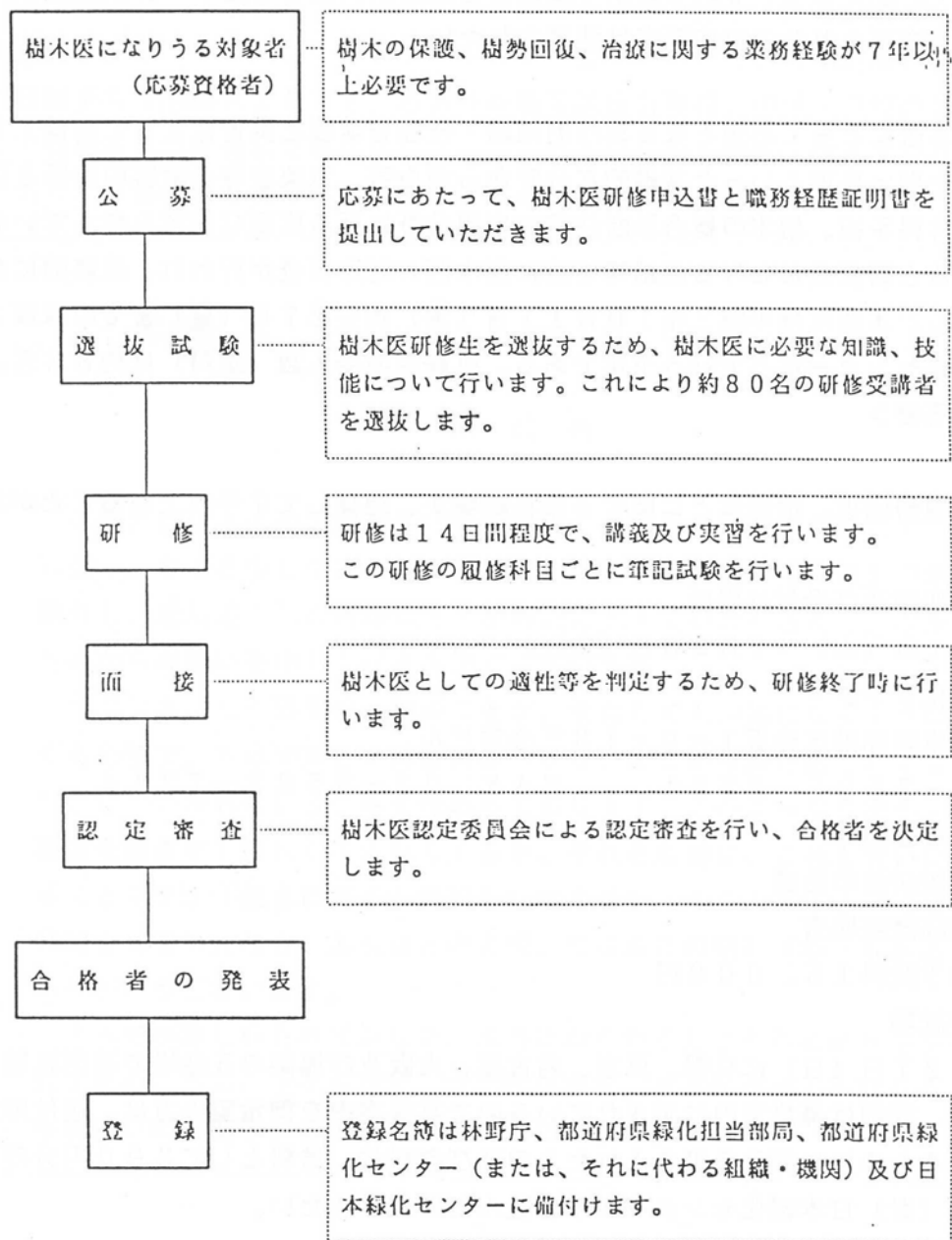
樹木医学研究会発足へ

平成6年9月に開催された日本樹木医会理事会の決議を受けて、樹木医学研究会の発足準備のための検討会（検討メンバー鈴木和夫東京大学教授ほか10名）が平成7年1月12日と3月2日に開かれた。設立趣意書（案）、設立発起人（案）、会則（案）などが審議された結果、9月中旬をめどに設立総会を開催すべく、樹木医会内に5名の設立準備委員会を設け、実質的な検討、および事務作業を行うことになった。

あなたも樹木医に！！

—平成7年度樹木医研修受講者募集案内発表される—

○ 樹木医になるまで



平成7年度樹木医研修生の募集について

-応募受付は6月1日から7月28日まで-

(財)日本緑化センターでは、平成3年度に林野庁の補助事業として、樹木医を養成、認定する樹木医認定制度をスタートさせた。この制度は、全国各地の貴重な巨樹、名木などを護っていくため、樹木の保護、樹勢回復、治療等に関する専門家の育成を図るものである。近年、環境問題とりわけ緑に対する関心は急速な高まりをみせており、本制度に対する反響も年々、上昇している。なお本年度は研修生選抜試験を全国5カ所で実施するなど、募集内容が変更されたので応募者は注意されたい。

<研修会>

研修会は、樹木医にとって必須となる専門的知識・技能を講義と実習によって習得するもので、樹木の生理・生態といった基礎的な分野から病虫害、気象害等の諸害の診断と防除方法、樹木の外科手術、樹木の総合診断法等の応用分野に至る広範な内容を含んでいる。

研修会が終わると研修会における成績等を基に樹木医の認定審査が行われ、最終的に合格者が決定される。本年度は平成7年10月11日(水)から27日(金)までのほぼ2週間、筑波の研修センターなどで行う予定である。研修生の受入数(定員)は約80名。

<応募要領の概要>

1 応募資格

樹木の保護、樹勢回復、治療などに関する業務経験が、通算して7年以上あることが条件である。

2 応募受付期間及び受け場所

平成7年6月1日(水)～7月28日(金)

(財)日本緑化センター

〒107 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル

電話 03-3585-3561 FAX 03-3582-7714

3 応募に必要な書類等

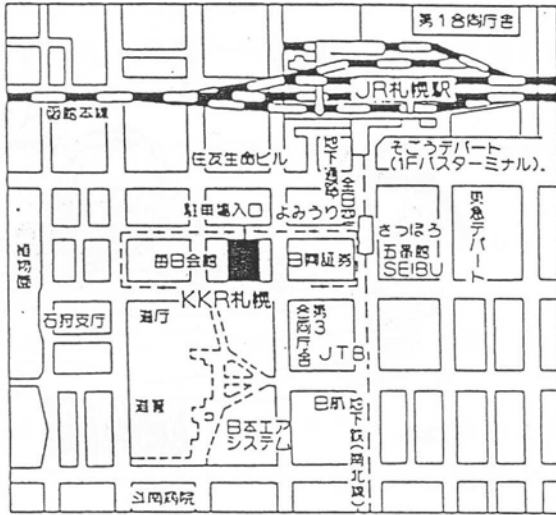
- (1) 樹木医研修申込書
- (2) 業務経歴証明書
- (3) 受験手数料15,000円

4 研修生選抜試験

平成7年8月27日(日)に札幌、東京、名古屋、大阪及び福岡の5会場で筆記試験を実施する。なお、詳細は募集案内に記載されているので募集案内を御希望の方は、送付用封筒(A4判の入るもの)に宛先を書き入れたもの及び資料代、送料として390円分の切手を同封して、(財)日本緑化センターへ申し込んでいただきたい。

— 試験会場案内図 —

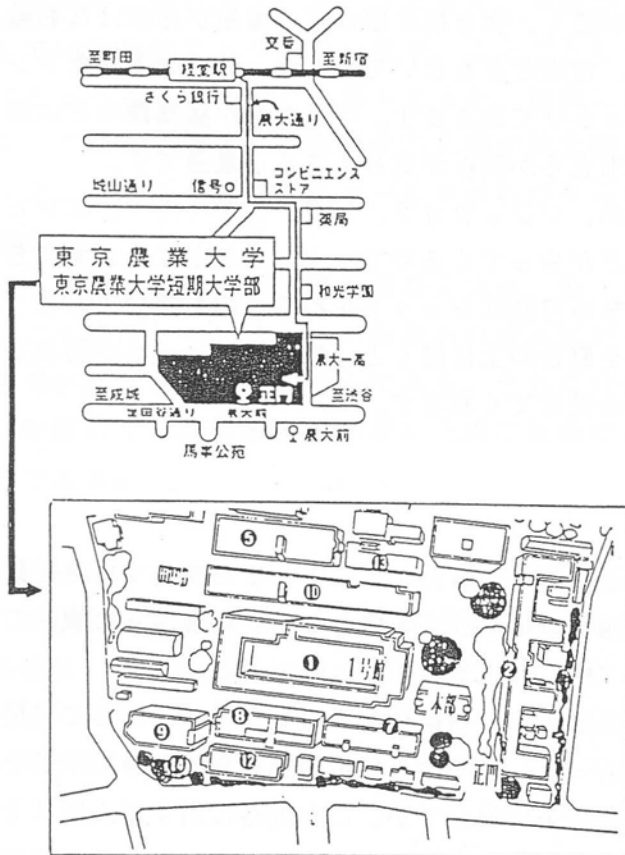
● 札幌会場



(交通機関)

- ・千歳空港からバスで70分、JRで40分
 - ・JR札幌駅南バスターミナルより徒歩3~5分
 - ・JR札幌駅より徒歩5分
- (目標は道庁庭園北側の白い建物)

● 東京会場



(交通機関)

上野	JR山手線 約24分	新	小田急線 約16分	茗荷谷	徒歩 約12分
東京	JR有楽町線 約13分	茗荷谷	小田急線 約9分	茗荷谷	バス 約7分
西口	地下鉄千代田線 約33分	代々木上原	東武野三川線 約14分	茗荷谷	バス 約7分
品川	JR山手線 約12分	茗荷谷	東武野三川線 約14分	茗荷谷	バス 約7分

バス: 20-60分

- ・JR茗荷谷駅 3番乗り場(成城学園前駅行)東急バス・小田急バス
20番乗り場(相模谷大駅行)東急バス
 - ・小田急線千代田線駅~茗荷谷駅(東急バス) 約5分
専ツバ行(東急バス)
- ※各東京農業大学前下車

(注：応募書類の様式、記載要領
および名古屋、大阪、福岡会場
の案内図は掲載を省略しました。)

お問い合わせは日本緑化センターへ！

小鳥たちとつきあって見ませんか？

—バードテーブルと巣箱の設置—

春がめぐって、また小鳥たちの恋の季節がやってきました。しかし、せっかくの恋がみのっても、小鳥たちの世界もまた、非常な住宅難で、スズメやムクドリが少ししかない巣箱の取り合いをしている光景をよく見かけます。

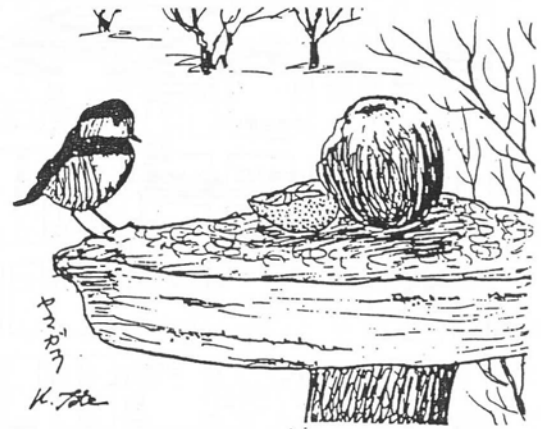
ちょっとした木立ちがあれば、彼等のために巣箱を用意してやりたいものです。そうすれば毎年、空き家の煙突などに落込んでかわいそうな死に方をする小鳥の数を少しでも減らすことができるでしょう。

小鳥たちにとって餌の確保も大切です。居間から良く見える窓の外近く、初冬から春にかけて、クイの先にありあわせの板切れや、丸太を輪切りにした円盤などをチョイと打ちつけただけで、立派な餌台（バードテーブル）ができあがります。クギの頭は出しておき、餌を差したり結び付ける手掛かりにするのが良く、吹き抜け屋台式の屋根があればなお結構です。餌にはパン屑や、砕いたピーナツ、古米などをまいておくか、鮮度の落ちたリンゴや網袋に入った豚の脂身などをクギにひっかけておきます。小鳥たちが猛禽類などに襲われそうになったとき、逃げ込めるような木立ちか茂みが周りがあると最適です。

眺めていると、冬場はとくにスズメのほか、シジュウカラ、ヒガラ、ヤマガラ、エゾヒヨドリ、ときにはアカゲラなどのケラ類などがやってくるので、大いに心が和みます。ちょっとした望遠機能のあるカメラで小鳥たちの自然なショットをねらうのも良いでしょう。

水が凍らない季節には、水を入れた容器を餌台の上に置くと、喉の渴いた小鳥が訪れて水を飲んだり、可愛らしい水浴びの姿などを見せてくれます。

皆さんも、今年からやってみましょう！



編集後記



平成7年の桜も間近になってきた。「ことしまた梅見て桜藤紅葉」52才で世を去った西鶴の句をひくまでもなく、いまさらに歳月の流れの早さが身にしみて感じられる今日この頃である。

平成3年に林野庁の国庫補助事業、「ふるさとの樹保全対策事業」の一環として発足した樹木医認定制度であるが、平成7年をもって、まずは5年目の第一期事業最終年度を迎える。この間、樹木保護に関する世間の期待を反映してか、この資格に対する人気は上々で、応募者も年々増えている。今後、さまざまなかたちでの見直しがなされ、この制度のあり方も変わって行くものと思われるが、ともあれ樹木愛護の一点で結集した会員の皆様の協力を基に、本会のますますの発展を期したいものである。（O生）